

# 国際開発学会第29回全国大会

## 共通論題(一般公開)



国際開発学会  
The Japan Society  
For International Development

日時

2018年11月23日(金・祝)  
15:30～17:30

会場

筑波大学第3エリア 3A204教室

参加費

参加費無料・事前登録不要  
どなたでもご参加頂けます

登壇者

関根久雄 (筑波大学教授)  
青柳茂 (ユネスコ・バンコク事務所長)  
北村友人 (東京大学大学院准教授)  
菅原鈴香 (国際協力機構国際協力専門員)  
真崎克彦 (甲南大学教授)  
斎藤文彦 (龍谷大学教授)

「開発と文化の実践的距離感」

文化の居場所

「持続可能な開発」における

SUSTAINABLE  
DEVELOPMENT  
GOALS



主催:国際開発学会

お問い合わせ: 国際開発学会第29回全国大会実行委員会

mail…jasid2018@gmail.com web…<https://www.jasid.org/>

# 「持続可能な開発」における文化の居場所 ～開発と文化の実践的距離感～

2015年9月「国連持続可能な開発サミット」において、17の持続可能な開発目標(SDGs)を含む「持続可能な開発のための2030アジェンダ(2030アジェンダ)」が採択されました。以来SDGsはアイコンとしてのわかりやすさも手伝って、途上国開発はもとより、国内の地方行政や企業活動等においても実践活動の指針として取り上げられることが多くなっており、一種の「ブーム」のような使われ方をされている様にも思われます。

では「持続可能な開発」とは何でしょうか。言葉通りに捉えれば、「持続可能な開発」概念での持続の対象はあくまでも開発です。「2030アジェンダ」では、「経済的、社会的および技術的な進歩が自然との調和のうちに生じる」繁栄を開発と呼んでおり、経済、社会、環境の3側面の調和によって実現されることが強調されています。同時に「2030アジェンダ」では目指すべき世界像として文化的多様性の尊重が謳われています。これは繁栄の姿や何を以て豊かさを感じるかについては絶対的普遍性がないことを意味していることになります。実際にこれまでの国連における一連の議論の中で、文化は経済、社会、環境に加え持続可能な開発の第4の柱として位置づけるのみならず、これらの3側面の統合的基盤として位置付けるものとして考えられてきました。

文化というと過去から変わることなく連綿と続いてきたものを想像しがちですが、政治的、社会的、経済的なものを含む外部からの刺激との相互作用の中で常に変化し、現在もなお変化の途上にあるダイナミックなものです。こうした文化のダイナミックな側面を考えると、持続可能な開発は普遍的な繁栄よりも持続可能な「幸福」感、あるいは近年よく耳にする、「良い生活(well-being)」という意味合いが強くなってきます。すなわち開発は受益者となる人びとの価値観、世界観、歴史的背景、社会システムを文化として理解、配慮し彼らにとって幸福感を得られるものでなくてはなりません。

本共通議題では、この「文化」に着目して、主に開発の実践に関わる人びとから、SDGsを実践化する際に文化をどのように扱っているのか、文化的多様性にどのように配慮しているのか、あるいはしていないのかを話題提供いただき、持続可能な幸福やよい生活という観点と文化的多様性を絡めることで見えてくる開発実践の姿を議論する機会にしたいと思います。

会場map



上記のQRコードから  
googlemapに接続できます

筑波大学第三エリア 3A棟2階204教室  
最寄りバス停  
“第三エリア前”より徒歩4分

